

医師で作家の久坂部羊さんは父親を介護している時、「治らない病気なら延命は不要」という本人の意思を尊重し、自宅で看取った。そんな在宅介護の体験を紹介したケ

アノート欄(7月13日付)への読者の反響の中に、うなずいてしま

う問いを見付けた。「どこからが延命措置になるのか、見極めがつかない」。寝たきりの母親を介護中という女性の声だ。

見極める自信のある人はわずかだろう。本人が「老

い衰え、管につながれて生きるの嫌」という思いだと知っていても、病院でこのままでは危険」と言われて動転し、示された措置にすがる家族は多い。メモリットについて十分な説明を

件」などの著書がある兵庫県尼崎市の長尾和宏医師は「命は有限。まず、人生の最終段階について考えてほしい」。満足して最期まで生きるには、縁起でもない敬遠せずに自分の終末期をイメージし、近所の在宅医を探して意思を伝えるなどの準備が大切という。

### いき方を考える

2030年の年間推計死亡者数は、現在より約40万人多い160万人。多死社会だからこそ人任せにせず、どこでどう生き、どう逝くかを考えておきたい。

受けたり、検討したりできず、救命が結果的には延命になって悔やんだという体験は珍しくない。遺る人を後悔させない手だてはないか。在宅で70人以上を看取った経験をもち、「『平穏死』10の条

文化・生活部次長 長谷川敏子